

ン收容所へ転属。

四月初め帰国の準備に入り、ナホトカへ二三日の後、いよいよ港へ。岸壁に着いていた「大郁丸」の日の丸を見たときの感激は今でも脳裏から離れない。船上で待ち受けていた看護婦さんの白衣のまばゆかったことが想い出される。四月十日、舞鶴へ上陸。十五日、故郷へ帰郷となった次第である。

抑留体験記

島根県 内藤 潔

私は、島根県大原郡木次町において大正十三年十月十三日出生。木次町立尋常高等小学校卒業後、青年学校本科四年卒業。昭和十四年十一月、鉄道省大阪鉄道局米子運転部木次機関区、機関士見習となる。

昭和十九年四月二十日、特別幹部候補生志願合格、中部第一一〇部隊第三一航空通信連隊第一期生（兵庫県篠山町）四カ月の教育を受けた後渡満。満州新京市

第二航空軍教育隊（第一六六九四部隊）河本隊和泉区隊第一班へ配属、昭和二十年六月三十日、教育終了。第二氣象連隊へ転属、満州新京南領八三九八部隊へ。同日付でチチハル第二中隊（衛門屯）飛行場に転属し、通信任務に就いた。終戦の詔勅は同所で聞いたが、混乱はなかった。

八月十七日、チチハル弾薬庫（十三部隊）集合、武装解除。九月二十七日まで同所において起居した。翌二十八日出発、チチハルの付近でエジトンの駅に向かい、当山朝富陸軍大尉の指揮下に入る。十月三日、千五百人の梯団で、東京ダモイにだまされて貨車に詰め込まれ出発。十月二十一日、ソ連領アルマータに着いた。

ここは第一收容所より第四收容所まであり、一收容所で二千人くらい收容する施設だった。日本人千五百人の他、ドイツ人、朝鮮人、イタリア人等先客を合わせ二千人くらいと聞いていた。

ここでの最初の作業は、鋳物工場（カツウラ工場）で油倉庫勤務を二十年十一月二十七日より二十一年三

月二十二日まで約四カ月間、貨車積みめの油をドラム缶に移し替える作業だった。十七人の班長として勤務したが、その中に東大出身の田中上等兵がいて、彼のアドバースで作業能率が物凄く上がり、一二〇パーセントくらいで成績で、食事の増配と信用度が高まり、その後の作業に大いに助かった。また、三月二十三日より一カ月余りの野菜工場の作業では、十五人の班長として、野菜の加工、選別、運搬、漬物製造、また各地収容所への配送作業で、成績優秀、ハラシヨラポーターで信用を得て、カンボイの引率なしで出入りが自由となった。その後、鉄屑の仕分け整理や貨車積み作業等にも信用を得て、五月に入って司令部の食品運輸係の作業に就いた。以前はドイツ人がやっていたが、交代して班長の責任者となり、帰還までの約二年間の作業を任せられた関係で、食物には不自由を感じたことはなかったため、他の抑留者とは違って随分恩恵を得た。

そのときに得た食糧配給基準は左の通りである。

雑穀四百五十グラム、パン三百五十グラム、野菜八

百グラム、肉五十グラム、塩十グラム、砂糖十八グラムが一日分となっていたが、ソ連側の横流しやビンハネで実際には大分少量になっていたようだ。しかし、私の場合は抑留中の生活は比較的幸運に恵まれ、先にも書いたように食事にはあまり苦勞しなかった。

一に食糧、二に被服、三に住居、四に衛生、五に寒さと思うが、衛生面での不都合があった罪に問われ、責任者として三日間営倉に入れられた経験がある。

昭和二十三年五月七日、アルマータ出港、ナホトカへ五月二十四日に着いた。

ナホトカでは、被服交換や検査により持ち物も全部取り上げられた。五月三十一日、信濃丸に乗船。六月二日、舞鶴港へ上陸。六月六日、復員した。二十三歳だった。体の回復後、県の雇員に採用され、六十歳の定年まで勤め、現在悠々自適の生活を送っている今日この頃である。